

Title	経済発展についての農業の役割：熱帯アフリカの事例(2)
Sub Title	Functions of agriculture in economic development : cases of tropical Africa (2)
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.5 (1982. 10) ,p.692(32)- 713(53)
JaLC DOI	10.14991/001.19821001-0032
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821001-0032">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821001-0032</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 経済発展についての農業の役割

—熱帯アフリカの事例— (2)

矢内原 勝

- (b) ディオラ
- (c) 輸出作物生産地帯
- 4 土地豊富地域
  - (a) チオゴ
  - (b) ピナ
- 5 新農業技術の導入と出稼ぎ
  - (a) ジョリバ
  - (b) ヤルンカ
  - (c) 中央ガンビア
  - (d) ハヤ
  - (e) レント—ハ・モラボ

## III 結 び

### 前号

#### I 設問

- 1 2部門モデル
- 2 生産関数

#### II 事例

- 1 自然条件のきびしい地域
  - (a) カリモジョングその他
- 2 人口稠密地域
  - (a) マグマズ
  - (b) コフィヤー
- 3 部分的土地不足地域
  - (a) ティヅ

#### (b) ディオラ

セネガルの低カサマンズ (Bas Cassamance) のディオラ (Diola) 族 (人口約21万人)<sup>(1)</sup> の居住地区の土地は、水田、落花生畑、未開墾の森林にわけられる。ディオラにとって稲作は伝統的農業であり、他方で、換金作物の落花生栽培は比較的新しい<sup>(2)</sup>。稲作が主として女の担当、落花生栽培が主として男の担当であることは、ガンビアのガンビア川南沿いのジュニエリ村と同様である<sup>(3)</sup>。

注 (1) Sapir, Olga Linares de, "Agriculture and Diola Society," as ch. 6, in McLoughlin (ed.), *African Food Production Systems*, The Johns Hopking Press, Baltimore and London, 1970, p. 197.

(2) *Ibid.*, p. 206.

(3) *Ibid.*, p. 215. Haswell, M. R., *Economics of Agriculture in a Savannah Village*, H. M. S. O., London, 1953, pp. 8~9. および矢内原 勝『アフリカの経済とその発展』文真堂, 1980, 41~52 ページ参照。

### 経済発展についての農業の役割

低カサマンスは平地であり、稲作は灌漑、移植、施肥による継続的耕作が可能である。水田の景観は農地の交換分合以前の日本の水田と酷似している。スキは長柄のヤリの穂先を平たくしたようなもので、日本のように足下に振り下す型ではなく、ナギナタのように使う。耕起は男の仕事であるが、田植は女が行なう。

他方、落花生の栽培はブッシュを開墾して3～4年栽培し、その後4～10年を休耕する、移動農耕が行なわれている。<sup>(4)</sup>

稲作は集約的、落花生栽培は粗放的すなわち前者は労働集約的、後者は土地集約的技術が採用されている。

ディオラ族の土地保有制度は、伝統的作物である水田を基本とするようである。土地は個人的に、屋敷の既婚の男親 (agnate) によって保有されており、父系の息子に相続される。女は一般的に土地を相続しない。土地を入手する方法には4種類ある。

(1) 息子が結婚年齢に達すると、父または父が死亡している場合には父の兄弟により2～3枚の田が与えられ、結婚するとさらに追加される。彼の一生の間に、家族規模に応じて、より多くの田が配分されるかもしれない。1人の男はその所有する田を取り上げられることはないが、もし耕作可能な面積以上の土地を所有していれば、それを再配分するか、彼自身の大家族以外の人を使用させることを要求される。また男はその土地を妻たちに平等に配分しなくてはならない。

相続によって得た土地では増加した人口に不足する場合には、家系を利用する借地という方法がある。これも余剰な土地の再配分の方法であろう。すなわちディオラの土地保有は個人的と共同体的の両方の性格をもち、土地の耕作能力に応じた平等な配分を原則としている。

(2) 家畜を担保にして土地を得る。この土地は父系により相続できるが、家畜が戻されれば、その土地は返却される。

(3) 未耕地への漸進的拡張。もはや低カサマンスでは優良な川の周辺地は少ししか残っていない。マングローブ生育湿地への拡張のみ可能であるが、このための費用が大きい。

(4) 他部族を征服することによる領地拡張。これはフランス植民地統治によって部族間抗争が平定される以前のことであって、いまではディオラの古老の間の昔語りの対象にすぎない。

水田に関して、その面積は農民1人あたり1.35～2.09ヘクタールである。さしあたり未利用地はないにしても、一応十分な土地を保有しているようである。今日の土地紛争は家畜の抵当でその土地を買ったとする近代的解釈と、貸しただけだとする伝統的解釈をめぐっておこっている。

これに反して落花生畑は、農民1人あたり0.75～1.5ヘクタールの畑を3枚所有して輪作している。その村の内部に未利用のブッシュがあるか否かが問題であるが、なければ他の村に行って畑を借りる。乾季中に落花生にとっての適地を求め、いくつかの村を訪れる農民と、地力が劣るが近く

注 (4) McLoughlin, p. 210.

の村に行く農民とがある。<sup>(5)</sup>

他の村に2～3ヵ月出掛けるのは明らかに出稼ぎである。出稼ぎ人は屋敷内に居住を得、食糧を支給される。土地の賃貸料はない。出稼ぎ人と屋敷の家長との関係は、血縁関係によらず友情関係にもとづく。この友情関係を保つために、出稼ぎ人は定期的に贈り物をし、その反対に屋敷の家長は出稼ぎ人に米の前借をするというが、セレル族に比べ、<sup>(6)</sup>屋敷の家長のために労働しなくてすむだけ出稼ぎ人にとって有利であろう。このような出稼ぎ人に対する優遇は、部族的寛容がイスラム慣習によって強化されたものとしてすまされてよいのか、私は疑問であるが、残念ながら資料がない。

ディオラにとって米と落花生という二つの作物が存在するから、水田を拡張する余地が費用的に不可能であっても、労働力が落花生生産に投入され、それに加えてセネガルの首都ダカールへの青年の逃亡のみられる今日、労働力不足のために放棄される田がある。<sup>(7)</sup>したがって低カサマンスは、稲作については労働力不足、落花生生産については土地不足という現象を示している。このことは、結論にとりあげる自給用食糧生産と換金用作物生産との間の土地と労働の配分の問題にはほかならない。

#### (c) 輸出用作物生産地帯

輸出用換金作物の生産がある所で開始されると、海外からの需要の増加により生産は拡大する。居住地周辺に土地が不足するようになれば耕地は遠くなり、畑へ通勤するには距離が遠くなりすぎれば出小屋を作り、さらに居住地も移転する。ココアは樹木作物であるが、数10年たつと木が老齢化し結実がわるくなる。また虫害が発生すると木は焼却しなくてはならない。そこでココア農民は新しい森林地帯に移動する。ガーナのココア栽培は南東部のアクワピム(Akwapim)内のマンポング(Manpong)で1879年に始まったが、ここからクロボ(Krobo)とニュー・ジュアベン(New Juaben)に急速に拡がり、さらにアキム・アブアクワ(Akim Abuakwa)へ移動した。そしてココア栽培は1880年代にアキム(Akim)経由でアシャンティ(Ashanti)地方に入った。<sup>(8)</sup>

ナイジェリアのココア栽培は西のヨルバランド(Yorubaland)から始まったが、ここでもココア生産地帯は、オンド(Ondo)とイフェ(Ife)からさらに南西に移動しつつある。<sup>(9)</sup>

セネガルの落花生生産についても、初期の大生産地帯が人口増加と地力の低下により、この生産が衰退するに応じて、農民は生産地帯を東方の新開地(Terre Neuve)に求め、新開地そのものもまた東方に移動しつつある。<sup>(10)</sup>

注 (5) *Ibid.*, pp. 207~211.

(6) 矢内原, 前掲書, 88~92 ページ, 145~147 ページ参照。

(7) *Ibid.*, pp. 223~224. 農村青年の都市への逃亡については, 矢内原, 前掲書, 55~66, 124~125 ページ参照。

(8) 矢内原, 前掲書, 178~181 ページ。

(9) 同書, 181~183 ページ。

### 経済発展についての農業の役割

輸出用農産物の生産にとっては、農民自身が新しい土地に移動するので、土地よりも労働力がつねに不足傾向にあり、これは他地域からの出稼ぎ労働者によって充足されたのである。<sup>(11)</sup>

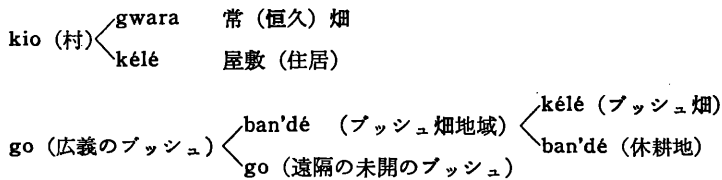
## 4 土地豊富地域

### (a) チオゴ

チオゴ (Tiogo) はオート・ヴォルタの首都ワガドゥグの西約 130 キロメートル、北緯 12°10′、西経 2°40′、乾季と雨季に明確にわかれるスーダン型気候区の中心地帯に位置する。さらに西方デドゥグ (Dédougou) に向うとき、黒ヴォルタ川の手前の最後の村で、そこから先は眠り病と河川盲目病 (river blindness) のために無人地帯となる。主要部族はレラ (Léla) で、1961年の人口調査によると住民数は 832 人である。そのうちレラ人口は 800 人、すなわち総人口の 95 パーセントを占める、同質人口をもつ地域である。チオゴに屋敷は 38 <sup>(12)</sup> ある。

チオゴの特徴はこれが他地域から移住した人の開拓村であることに見出される。定着にあたり、土地は自由財であったが、隣村との抗争はみられた。

チオゴ経済圏は村とブッシュ地帯に大別される。村は屋敷地と常畑 (恒久畑) に細分される。ブッシュ地帯はブッシュ畑と遠隔の未開ブッシュに細分される。ブッシュ畑は耕地と休耕地にさらに細分される。これを図式化すると以下ようになる。



屋敷内の住居は外部には完全に閉じ、三つ葉のクローバー型の円筒形の家が連結するきわめて特異な型を示す。屋敷内には穀物倉、ニワトリ小屋、豚、羊、山羊の囲い等を含む。

常畑の一部は屋敷に隣接した庭畑であり、きわめて狭く、2 ないし 3 メートルの長さで展開している。主要作物はトウモロコシであるが、その他各種野菜と近年に導入された根茎植物および稲作がなされる。水田は凹地に滞留した雨季の降水の結果であり、造成されたものではない。稲作は直播である。

庭畑は家庭のゴミと家畜の糞によって肥沃となるが、これは意図的な施肥ではなく、庭の定期的な清掃の結果である。<sup>(13)</sup>

注 (10) 同書, 144~145 ページ。

(11) 同書, N.

(12) Barral, Henri, *Tiogo (Haute-Volta)*, ORSTOM, Paris, 1968, pp. 7~8, p. 22. チオゴについては、すべてこの資料に依存する。

(13) *Ibid.*, pp. 22~28.

常畑の最大の部分はその外庭にあり、代表的作物はソーガムである。小家畜すなわち羊、山羊、豚の糞、人糞、ゴミによって肥沃化することはあるにしても、総体的に施肥されず、組織的な農作物栽培の継続はない。雨季には凹地に水が入り、一種の天然の施肥が行なわれる。ソーガムが10年継続して播かれ、地力がつきると1～10年間休耕される。しかし休耕は規則的な輪作の一部を形成せず、むしろ偶然的である。繊維フランス会社 (Companie Française des Textiles: C. F. D. T.) によって種子が配布された結果、最近綿花栽培がここに導入された。<sup>(14)</sup>

ブッシュ畑のうち、住居に近い部分は、耕作と休耕の長い期間中に作られたネレ (nére) とカリテ (karité) の有用樹園を特徴とする。住居から遠いブッシュ畑は樹林サバナ (savane boisée) にあり、最も遠い畑は村から直線で4～5キロメートルに位置する。

ブッシュ畑の総面積は560ヘクタールであり、畑が100枚存在するので畑あたり平均5.6ヘクタール、世帯(耕作単位とみられる)<sup>(15)</sup>数60なので、世帯あたり9.33ヘクタール、屋敷数34から、屋敷あたり、16.5ヘクタール、また男子労働人口は167人であり、1人あたり3.35ヘクタールとなる。<sup>(16)</sup>

チオゴの土地保有制度をみると、まず(1)創設者のバコ (Bako) 系の8家系、20屋敷、500人、(2)よそ者の9家系、18屋敷、350人から構成されていることが注目される。(1)のバコ系の8家系の長の権利は常畑ばかりでなくブッシュ畑にも及ぶので、すべての耕地はこれら8家系に分割されている。したがって理論的には、8家系以外の者は8家系に従属していることになるが、実際には誰でもブッシュの新しい土地を開墾しようとするとき、地質、植生その他から判断して最もよい土地をまず選び、その後土地所有者を探して、ニワトリ1羽の犠牲による儀礼をもって容易に土地使用権を与えられる。借地料はない。家系がどうあろうと、借地の要求を拒否することはわるとみなされている。一度使用権が認められれば、取り上げられることはなく、借地人が死ねばその相続人は土地使用を継続できる。約8年ののち、地力がついて休耕地になれば、もとの土地保有状態に戻る。耕地拡張も一般には困難ではない。その条件は耕作者がチオゴに居住していることだけである。妻は夫の使い古した畑をもらう。<sup>(17)</sup>

新しいブッシュの開墾、大きなブッシュ畑の除草、屋敷の拡張のための解体には、家族労働力では不足するので、外部からの労働に依存する。この方式として(1)3人の友人間の除草のための相互扶助、(2)青年団の奉仕、(3)夫役、これは共同体の義務であって、参加しない者は実物で料金を支払う。夫役徴集者は参加者に食事を出す。期間は1日だが人数が多いと食事提供の出費がかさむ。(4)賃労働、1日100フランであるとして、10日雇用すれば1,000フランを家長は調達しなければならない。この場合、食事(糧)が賃金財そのものであるから、(3)の夫役の費用は実質

注 (14) *Ibid.*, pp. 28~31.

(15) 屋敷と世帯の関係については、矢内原、前掲書、88~89 ページ参照。

(16) Barral, pp. 32~34.

(17) *Ibid.*, pp. 46~47.

### 経済発展についての農業の役割

的負担という点では(4)の賃労働と差異がないように、私には思われる<sup>(18)</sup>。

チオゴからコート・ジヴォワールとガーナへの出稼ぎは少ないが、それでもこれは農繁期の労働力を奪うことになる。

チオゴ農業では穀物優先であり、換金作物の綿花と落花生は女だけが担当する。この点は他の多くのアフリカ農業と逆になっている。

チオゴは住居固定、農地移動の農村のようにみえる。牛は牧畜専門のプール (Peul) 族に預託するが、施肥の契約はない。山羊と羊は多く、ニワトリもホロホロ鳥もすべて飼養の目的は宗教、儀礼、社会上のものである。卵も子供用にしか消費されない<sup>(19)</sup>。近年導入された豚と七面鳥は、非宗教的目的のために抵抗なく販売される。

したがってチオゴではせっかく飼育されている牛の糞は肥料としては使用されず、畑は地力がつきるまで耕作され、しかも農業の成否は降雨に大きく依存する、きわめて粗放的な農業である。農業技術水準が低いので、1平方キロメートルあたり5人で、しかも土地が余剰であるにもかかわらず、人々は栄養不良と不健康の慢性的状態下にある。食糧供給が十分でないのに換金作物栽培と出稼ぎ<sup>(20)</sup>が、小規模ではあるが行なわれているのは、税支払い等のための貨幣の必要によるものであろう。

#### (b) ピナ

ピナ (Pina) とダンフィ (Danfi) (同一集団であるが、帰属する首長が異なるため二つの名で呼ばれる。以下ピナと呼ぶ) 村は、オート・ヴォルタの北緯 11°10′、西経 2°40′ あたりにある村である。住民は 527人 (1960年代後半か) の開拓村<sup>(21)</sup>である。彼らは 18世紀末に土地不足と、彼らより強力な好戦的なダゴンバ (Dagomba) 族により東から押されて、ガーナ領から移住してきて定着したが、フランス統治下の労働徴集と輸出用作物の強制栽培を避けて逃亡していたのが、第2次大戦後にオート・ヴォルタに戻ってきて、新たに最も豊かな土地に定着したのである<sup>(22)</sup>。

住民数は上記のように527人とされているが、調査者の家から家への調査によると、1964年12月に、ピナに213人、これにガーナへ出稼ぎに出発した青年18人を加えると、231人となる<sup>(23)</sup>。1人あたり耕地面積は1.2ヘクタールとなる。労働人口 (15~60歳) あたり耕地面積は2ヘクタール、男子労働人口あたり耕地面積は2.75ヘクタールである<sup>(24)</sup>。ここに20農家 (屋敷) (yir) があるが、単独で生活している頭の弱い1農家と、最近定着したモンの家系のものを除くと18農家になる。

注 (18) *Ibid.*, pp. 49~51.

(19) *Ibid.*, pp. 37~38.

(20) *Ibid.*, pp. 55~57.

(21) Savonnet, Georges, *Pina (Haute-Volta)*, ORSTOM, Paris, 1970, p. 7. ピナについてはすべてこの資料に依存する。

(22) *Ibid.*, pp. 15~19.

(23) *Ibid.*, p. 45.

住居は円筒形の草ぶきであり、壁に囲まれた中に不規則に配置されている。家族構成員が増加すれば拡大し、死亡や子供の離村があれば縮小する。5～10年経過して建物が老朽化すれば、近隣に新築する。家畜は屋敷内には入れず、小屋ないし囲いを別に外部に作る。住居の建築様式は変化しつつあり、ガーナ帰りの青年の影響のもとに近代化した部分と伝統的部分が同じ屋敷内に共存している。<sup>(25)</sup>

畑には以下のような種類がある。

(1) 庭畑。砂質土壌で、毎年家庭内のゴミと家畜の糞により肥沃化され、恒久(常)的耕作が可能である。これは屋敷あたり家畜数に依存する。作物はトウモロコシ、ミレット、ソーガム類と調味料等である。

(2) 半恒久(常)畑。庭畑の外延に拡がり、庭畑よりも広い。家畜の群が通過する以外に施肥はない。収穫量が低下すると2～3年間休耕する。休耕地は雨季中に山羊と羊の放牧場となる。農繁期には農民は夕方、ブッシュ畑からの帰途以外にこの畑に時間を割かない。作物はヤム、ピーマン、湿度の高い地帯のサツマイモ等である。

(3) 谷畑。雨季に浸水する地帯では水稻が栽培される。水が引いた12月初めには野菜と調味料が作られる。3月初めになると水が深く、農民は行けなくなり、耕作は放棄される。

(4) ブッシュ畑、休耕地によって村から隔てられており、その最大距離は3キロメートルである。畑は細長い長方形に展開しており、野生動物が農耕を妨害するが、村人にとっては最も重要な畑である。施肥せず、地力のつきるまで6～7年継続して耕作され、その後30～40年に及ぶ長期間休耕される。作物はソーガム、ミレット、豆類、落花生等<sup>(26)</sup>である。

土地保有制度は、先着者が村長であり、新来者に儀式によって土地使用権を与える。新来者は休耕畑に屋敷を建造し、その周囲を耕作することから始めて、谷に向かって拡大する他方、処女地であるブッシュにも向う。戻る意図なく村を出た人の畑は、村長により再配分される。各畑の面積は、耕作する経済単位(屋敷)の居住者数の関数である。畑を拡大する場合には、隣人から一部を借りるか、ブッシュを開墾することになる。よそ者のモン族は畑を借りる。土地はつねに本来の出身地のシッサラ(Sissala)に属しているが、シッサラからいくらかの代表権しか得ていない村長は、土地保有についての慣習法を村民に遵守させる力は弱く、個人主義の抬頭に直面して伝統的秩序は破れつつある。<sup>(27)</sup>新しく開墾した土地は開墾者に帰属する方向にあるらしい。しかしながらブッシュが豊富に存在するかぎり、土地の配分が厳しい状態に陥ることはないであろう。

注 (24) *Ibid.*, p. 56. 村畑面積は1963年に120ヘクタール、1964年に133ヘクタールと推計された。*Ibid.*, p. 53.

(25) *Ibid.*, p. 24, pp. 31～32. 住居と生活様式がガーナ帰りの出稼ぎ人によって近代化することについては、矢内原、前掲書、124ページ参照。

(26) Savonnet, pp. 34～36.

(27) *Ibid.*, pp. 36～43.



### 経済発展についての農業の役割

労働については、開墾と除草は共同作業により、播種、収穫、村畑の手入れは家族労働による。共同作業は相互扶助を基本原則とする。その形態には(1)義父のための親戚・友人グループによるもの。年に2回すなわち開墾と第1回の除草、これは伝統的義務で、若い女がビールのつぼをもって畑の縁で見ているので、各人は勇気を誇示し競争するという。(2)友情による相互扶助で、作業日の何日か以前に招請される。これも義務であり、日本の伝統的な田植と似ている。(3)友人のための、義務ではない援助。農作業のおくれを取り戻すため各参加者は都合のよいときに来る。夕方食事が出される。(4)昔の夫役で、村長のための1年1日の労働であるが、今日は廃れた<sup>(28)</sup>。

ピナは人々が耕地を求めて定着した農村であって、水があり、肥沃な処女地がまだ豊富である。他方、農作業は短期間の降雨期に集中するので、農民は骨身を惜しまず労働するが、除草がおろそかになると収穫量は減少する。農器具が未発達で、また水の管理ができないので、現在の男子労働人口あたり3.75ヘクタールの耕地をこれ以上拡張することは、労働時間の制約により不可能と判断<sup>(29)</sup>されている。

農民は家畜の糞の利用が収穫量を改善することを知っているし、評価しているが、それにもかかわらず、施肥面積は全耕地の2～5%を越えない。というのは雄牛は経済財というよりも威信財であり、また子安貝とともに、とくに婚資と長老の葬儀のための犠牲財だからである。この日には全村の経済活動が停止する。

すべての主要道路から外れているピナでは貨幣経済の浸透は軽微である。5月と6月にガーナから戻る青年はわずかの貨幣しか持ち帰らず、それもミレットを購入し、税を支払ったあとは急速につきる。

ピナから最も近い市場はブラ(Boura)で約20キロメートルの距離にあり、雨季でも行ける。ピナ内の市場は5日市で、近隣の人だけがくる。この市は生産物の交換というより情報交換の場であって、ほとんどの人は何も買わない。市場にある商品の大部分は旧イギリス領のガーナよりくるので、輸入品はイギリス製である。地場商品に対しては子安貝、製造品に対しては一般的にはガーナ通貨で支払われる。

すなわちピナは経済的にはガーナ経済の一部を形成し、社会的関係もガーナにいる家族と結ばれている。ピナの村民にとって、ガーナのタマレ(Tamale)とクマシ(Kumasi)はもとより沿岸の首都アクラさえ知られているのに反し、オート・ヴォルタ内の大都市ワゴドゥグヤボボ・ジュラッソ(Bobo-Dioulasso)は無視されているのである。つまり行政的にはピナはオート・ヴォルタに属<sup>(30)</sup>していても、社会・経済生活はガーナに属している。

注 (28) *Ibid.*, p. 48.

(29) *Ibid.*, p. 58.

(30) *Ibid.*, p. 61.

ピナは土地が豊富であるにもかかわらず、豊かな農村とはみなされない。村内では貨幣所得を得ることができないので、出稼ぎが行なわれる。一般的にはオート・ヴォルタからの出稼ぎ先は、今日ガーナからコート・ジヴォワールに移っているが、ここではいぜんとして出稼ぎはガーナに向っているのである。

## 5 新農業技術の導入と出稼ぎ

### (a) ジョリバ

ジョリバ(Djoliba)はマリの首都バマコの西南約19.4キロメートルに位置するニジェール川沿いのサバナ気候区に属する村である。ここでもこれまで紹介したサバナ気候区の諸村と同様に、農業にとって最も重要な影響力は川ではなくて降雨量である。降雨が集中するのは、7、8、9月の3か月だけである。住民は約1,700人、主要食用作物はソーガムであり、少量のはやまきミレット(bulrush millet)と川沿いの半灌漑地域で稲作を行ない、またいくらかのカサヴァ、トウモロコン、フォニオ(アチャ)を作る。豆類としては白ささげ(niébé)、パンバラ・ナツを自家消費用に、落花生を換金用に栽培している。オクラ、在来種のトマト、ナスのほか、近年ヨーロッパからトマトが導入され、これは今日では村の最も重要な換金作物である<sup>(31)</sup>。

生産と消費すなわち食糧の分配の単位(lu)を屋敷と呼ぶことにしよう。今日屋敷は平均10人から構成され、たとえば1人の男(家長)、2人の妻、4人の子供、1人の弟とその妻と子各1人である。屋敷が一度土地使用権を得れば、それは継続し、またその畑は分割されない。この畑の主要作物はソーガムであるが、しばしば白ささげまたは落花生と間作される。地力と村からの距離が異なるので、ある土地にはプレミアムがつき、紛争の種となるが、肥沃な高地が希少ではないのでそれほど深刻な問題ではない。屋敷に属する畑のほか、女は屋敷の傍らに個人的畑をもち、調味用作物を栽培する。男もまた婚資を支払い、あるいは自転車を買うための(換金)作物栽培のために、個人的畑をもつことができる。

最近導入されたスキと荷車を別として、資本財であるクワとオノの原材料である木材と鉄は豊富かつ低廉であるから、土地が豊富に存在する以上、希少な生産要素は労働ということになる<sup>(32)</sup>。

ジョリバはもと郡庁(head of a canton)のおかれた所であるので、フランスの植民地政策の影響をまともに蒙った。フランスがこの地方を征服した当時の観察は、天然資源の賦存はよくなく、人々は短い雨季に勤勉に労働するにもかかわらず、定期的に飢饉があり、土地は希少ではないが狩猟に食糧を依存させるには人口が稠密すぎるというものであった。所与の技術と環境の下でジョ

注(31) Jones, William I., "The Food Economy of Ba Dugu Djoliba, Mali," as ch. 8 in McLoughlin, pp. 266~271. ジョリバについてはすべてこの資料に依存する。

(32) *Ibid.*, pp. 283~286.

### 経済発展についての農業の役割

リバの人々は物理的限界まで食糧を生産しているようにみえた。

しかし、これがフランス人の支配的見解ではなく、マリ人を怠惰とみなしたフランス征服者は、時が経つとともに、彼らが欲した換金作物栽培の拡大のためには、新しい技術と単なる刺激は不要なのではないかと思ひ始めた。事実、ジョリバの人々は換金作物栽培が厄介なので、青年を町に出稼ぎにやるほうを選好したのである。

労働が生産の制約条件という見解に対しては、今世紀の前半中に、実質的な技術変化がないままに、新しい換金作物である落花生のために耕地が約10分の1追加されたという事実がある。また彼らはフランスの労働徴集にも応じ、政府の食糧貯蔵のためにいくらかのソーガムを栽培した。フランス統治下ジョリバは首都バマコ、フランス軍隊、セネガルのカオラック (Kaolack) の落花生畑あるいはガーナとコート・ジヴォワールのプランテーション (ココア等の樹木作物) のために労働を供給したのである。

労働徴集に応じることや出稼ぎは主として農閑期になされたので、たとえ労働力が農繁期の制約条件であっても、年間をとれば労働時間の延長は可能であった。しかし今日では換金作物である落花生の生産はジョリバの農業の中に組み込まれている。落花生生産と自給用食糧生産は、労働の制約条件により同時に増大することはできない。<sup>(33)</sup>

新しい技術として雄牛牽引のスキが導入されている。1ヘクタールの土地の耕起のためにクワでは20~40労働日が必要だが、スキによれば理想的には半分ですむとみている政府は、この導入に熱心である。ところがジョリバの牛は貧弱なうえに技術水準も高くないので、2倍の効率は生まない。スキと荷車の導入には貨幣が必要なので、このための換金作物の栽培と食用作物栽培とは、トレード・オフの関係にあるはずである。さらにジョリバの農民もすでに国際経済の中に捲き込まれており、コーラ・ナツはコート・ジヴォワールより、緑茶は中国より輸入し、砂糖も外部から購入している。<sup>(34)</sup> 独立後のマリ政府は1962年に西アフリカ通貨同盟 (Communauté Financière Africaine) を離脱したが、その後通貨価値を維持できず、1968年にこの同盟に復帰した際、かつての50CFAフラン=1フランス・フランの交換率が100マリ・フラン=1フランス・フランとなった。マリ政府は外貨不足に苦しんでいるが、歳入源である輸出税を軽減すれば、輸出品に対する世界需要曲線がマリにとって水平であるならば、輸出税を負担していたマリ農民にとって、輸出用換金作物栽培への刺激が生じるはずである。しかしそのために食糧生産が減少すれば、これは食糧輸入需要増加に反映する。マリ農民にとって換金作物の栽培はその貨幣購買力に依存しているとすれば、そしてその対象が輸入財であるならば、究極的には交易条件により、食糧生産と換金作物生産に対する労働配分が決定されることになる。さらに出稼ぎによって貨幣を入手する手段も開かれている。ジョリ

注 (33) *Ibid.*, p. 275, pp. 299~300.

(34) *Ibid.*, p. 270.

パの農民も価格に対する反応は十分弾力的と思われるので、土地が豊富であり、労働が希少であっても、自給用・換金用合計した生産量が、労働が流出する結果、最大生産量に達しない可能性も十分存在する。

(b) ヤルンカ

ヤルンカ (Yalunka) はシエラ・レオンの東北部の国境沿いに居住する部族である。居住地域は総面積約20,720平方キロメートル(約800平方マイル)で、海拔305メートル(1,000フィート)から610メートル(2,000フィート)の間にあるギニア高原の一部である。1963年の人口調査によれば、総人口28,882人のうちヤルンカと記載されている数は19,140人であるが、過少に推定されているようである。人口密度は1平方キロメートルあたり12.8人となる<sup>(35)</sup>。

主要な食用作物は米(水稲、陸稲)であり、補助的作物としてフォニオ、カサヴァ、トウモロコシ、落花生等がある。最近になって米を換金作物として栽培する者も出てきたが、全般的にはヤルンカは今日でも農業を貨幣所得の入手のためとはみていない。首都のフリータウンやダイヤモンド鉱業地帯に出稼ぎに行くことは普通のことで、1963年調査ではヤルンカ総人口の17%がヤルンカ支配地域外に住んでいた。家長が中年後期に達した屋敷からは少なくとも1人が外に出ている。

この移出の動機は現金の入手であって、シエラ・レオンの他地域のように、高い人口密度によるものではない、と調査者のドナルド(Leland Donald)は推定している。彼によれば、ヤルンカにはほとんど無人の大きな土地があり、そのすべての土地は可耕地ではないが、多くの小沼沢地と2,3の大沼沢地は未耕地であり、また潜在的陸稲栽培地は焼畑農耕のサイクルの一部には入っていない。たとえ焼畑農耕のサイクルと8年から10年の休耕期間を考慮しても、ヤルンカ地域は現在よりもかなり多くの人口を扶養できる、と推定されている<sup>(36)</sup>。

それにもかかわらず、特定農家の調査によると、ヤルンカ農民の20~30%は自家消費のために十分な米を生産していない。その原因は(1)天候、虫、動物、鳥による収穫物の損害、(2)播種の時期のおくれること、(3)作付面積の不十分、(4)不適当な農耕法である。そのうち(2)と(3)の主要原因は労働力不足、病気、借金である。負債のある農民は、その返済のために、また前年度の不作のために種子まで食べてしまった農民は、これを入手するために、まず他人の畑で働らかなければならない<sup>(37)</sup>。

労働力が不足するのになぜ出稼ぎに行くかといえ、これはもちろん貨幣所得の入手のためである。所得の一部は帰村の際に持ち帰られて、一部は食糧の購入に、多くは結婚、波型亜鉛鉄板の屋

注(35) Donald, Leland, "Food Production by the Yalunka Household, Sierra Leone," as ch. 5, in McLoughlin, pp. 166, p. 186.

(36) *Ibid.*, p. 177, pp. 185~186.

(37) *Ibid.*, pp. 181~183.

### 経済発展についての農業の役割

根をもつ家の建築、消費財に費消され、農業の生産的投資源とはならない。<sup>(38)</sup>

ヤルンカ支配地域は1964年ないし65年までは米を輸入していたが、今日ではいくらかの米をシエラ・レオンの他の地域に「輸出」している。生産増加の要因は低い平地に対する機械化農耕の導入である。これは肥沃な浸水土壌の収穫量を容易に2倍にする。農業局はまた改良品種と少量の化学肥料を導入したが、主要なものはトラクターである。

トラクターの使用は有料である。したがって富農だけがこの恩恵に浴する。労働力が生産の制約条件である社会では、富の源泉は労働力にある。平均年齢が低く、妻の数が多く、屋敷あたり人数が多い屋敷ほど機械化農耕を採用している。また非農業からの貨幣所得の多い農家ほど機械化を進めている。1967年の調査で、153人の農民のうち機械化農耕を実施しているのは23人である。<sup>(39)</sup>

したがって機械化農耕の導入は、農村内に所得階層格差を拡大する傾向があるのではないかと思われる。また出稼ぎ排出地域であっても、労働力不足地域であるから、外部からこの地域に入ってくる者もある。これらよそ者は、元来は現金ないし妻を求めにきたのであったが、最近25年間に移入してきたよそ者は商人と牧畜者で、彼らが大規模な機械化農耕の主要な受益者であった。既述のように、ヤルンカ農民は貨幣所得を消費のためのものとみなし、生産的投資や負債返済に対する関心がうすい。シエラ・レオン政府の農業信用計画の対象は、返済に信頼がおけるよそ者がヤルンカ農民にとって代わったのである。

#### (c) 中央ガンビア

牛馬の牽引スキと播種機はセネガルの落花生生産地帯にもすでに導入されている。<sup>(41)</sup> ガンビア川沿いの中央ガンビアにも政府主導の雄牛牽引スキの導入が成功した。<sup>(42)</sup> 農業局は雄牛牽引スキをすべてのガンビア農民に利用させて、平等な農業社会を創出することを狙ったが、実際に起ったことは、政府の農業信用の平均的ガンビア農民に利用できる量が限られていたので、牽引用雄牛を購入できた階層は、富農、伝統的寡頭支配者および大商人であった。

#### (d) ハヤ

ハヤ (Haya) は、タンザニア領のヴィクトリア湖西岸に居住する部族である。不毛の草地に家畜を放牧し、落花生とパンバラ・ナツとを栽培し、村内の畑では基本的食用作物のプランティンのほかに豆、さらに換金用作物のコーヒーや茶を栽培する。彼らは均衡のとれた生態系の中に安定し

注 (38) *Ibid.*, p. 185, 波型亜鉛鉄板については、矢内原, 前掲書, 98, 261, 280 ページ参照。

(39) *McLoughlin*, pp. 186~190

(40) *Ibid.*, p. 176.

(41) 矢内原, 前掲書, 90ページ, 153ページ参照。

(42) Weil, Peter M., "The Introduction of the Ox Plow in Central Gambia," as Ch. 7, *McLoughlin*, p. 262.

第3表 南アフリカ共和国鉱山労働者の出身国別配分

	南アフリカ	レソト	ボツワナ	スワジランド	BLS3国	ジンバブエ	マラウイ	アンゴラ	モザンビーク	合計
1974年7月…	92,550	74,341	19,581	6,101	100,023	4	107,069	3,073	85,936	388,655
1974年12月…	82,066	69,875	16,414	5,386	91,675	11	68,448	2,863	88,605	333,668
1975年1月…	94,467	66,568	15,869	6,645	89,062	218	68,816	2,778	87,960	337,301
1975年7月…	125,210	83,650	22,509	9,377	115,536	3,663	22,956	2,696	96,845	366,906
1975年12月…	110,084	75,696	19,181	7,049	101,926	7,052	2,711	3,047	107,478	332,298
1976年1月…	137,330	81,991	20,745	9,747	112,483	9,446	2,026	3,118	104,409	368,812
1976年7月…	174,610	88,348	25,924	11,994	126,266	17,269	178	2,483	68,360	389,166
増加率(%) 1974年7月～ 1976年7月	+89	+19	+32	+97	+26	…	…	-19	-20	+4

原資料: Mine Labour Organisation, Johannesburg.

(出所) Elkan, Walter, "Labor Migration from Botswana, Lesotho and Swaziland," *Economic Development and Cultural Change*, Vol. 28, No. 3 (April 1980), p. 587.

(43) た農業を営んでいた。しかしハヤ社会にも農地と仕事のない貧困階層がある。さらに1960年代後半には、化学肥料が導入された。これはインスタント・コーヒーに対する世界需要の増大をもたらした、ハヤ農民の貨幣所得の増加によって可能となったものである。<sup>(44)</sup>

(e) レソト——ハ・モラボ

レソトは熱帯にはないが、アフリカ農業の事例としてとりあげる。

南アフリカ共和国の鉱業は、国内ばかりでなく、外国からの移入労働力に大きく依存している。その1974年から76年までの状況は第3表にみられる。

この数字は、鉱山労働組織 (Mine Labour Organization) によって公けに徴集された労働者数であって、実際の労働者数はこの数字よりもはるかに多いと推定されている。<sup>(45)</sup>

この表にみられるように、南アフリカ共和国に地理的にも経済的にも距離の近いボツワナ、レソト、スワジランド3国からの移動労働者数が増加している。一般的には、労働力の不足傾向にある南アフリカ共和国内の鉱山の賃金上昇がその労働徴集の増加の必要条件であったとみなされるが、これら3国とくにレソトに関してはこの証拠は明らかでない。<sup>(46)</sup>

ルイス・モデルは、農業部門内に限界生産力ゼロの労働者(農民)が存在し、この部分が工業(この場合には鉱業)部門に吸収されて行く過程で、工業部門の賃金率を上昇させないというメカニズムにもとづいている。レソトからの南アフリカ共和国内の鉱山への労働移動は、1960年代の約51,000人から1970年の約71,000人に増加しているが、他

経済発展についての農業の役割

方この期間中に実質賃金はまったく変化しなかったのである。この事実はルイス・モデルの無制限の労働供給仮説を支持するようにみえる。

南アフリカ共和国内への労働移動が定着せず、出稼ぎ労働である理由としては、(1)南アフリカ共和国政府が事実上2年以上の滞在を許可しないこと、(2)移動労働者が単身であり、移動先での居住条件が単身用であること、結局は移動先での所得が家族扶養を可能にするほど高い水準ではないということになるのかもしれない。(3)移動労働者が既婚者の場合には、その行動は故郷に残した家族をも含めて、その総家計所得の最大化にもとづいていること、に求められる。<sup>(47)</sup>

スワジランドとボツワナの農業が土地に対する人口圧力がなお小さい状況に比べ、レソトは土地に対する人口圧力が大きく、労働の限界生産力がゼロの可能性が高いといわれる。<sup>(48)</sup>

レソトが土地不足であるという状況は、1950年から70年までの期間に土地保有者数は増加したが、4エーカー以下の小土地保有者数の増加が圧倒的であって、これは限界的土地の使用が増加したことを示唆するといふ。<sup>(49)</sup>第4表にレソトの土地配分状況がみられる。

第4表 レソト内の土地配分状況, 1970年

土地保有規模 (エーカー)	世帯	面積	%
			畑
土地なし	13	—	—
小 (0.01-3.99)	43	23	39
中 (4.00-7.99)	30	39	38
大 (8.00-14.99)	12	28	18
特大 (15以上)	2	10	5
総 数	212,228	909,788	402,220

(出所) Murray, Colin, *Families Divided*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981, p. 90, Table 4. 2.

レソト農業は低地と山地にわけられる。低地での主要作物はトウモロコシとソーガムであり、冬小麦と豆類もまた栽培されている。山地ではソーガムは実らず、最も重要な作物はトウモロコシ、夏小麦とエンドウ豆類である。<sup>(50)</sup>1月から5月までは低地の農閑期であって、ここから労働者が排出される。この期間に山地では小麦と豆の収穫と羊と山羊の刈毛が行なわれる農繁期である。これに

注 (43) Reining, Priscilla, "Social Factors and Food Production in an East African Peasant Society: The Haya," as ch. 2, in McLoughlin, pp. 42~45.

(44) *Ibid.*, p. 89.

(45) Elkan, Walter, Labor Migration from Botswana, Lesotho and Swaziland," *Economic Development and Cultural Change*, Vol. 28, No. 3 (April 1980) p. 585.

(46) *Ibid.*, p. 589.

(47) *Ibid.*, p. 585.

(48) *Ibid.*, p. 592, p. 594. 平方キロメートルあたり人口密度は、スワジランド: 31.7人, ボツワナ: 1.4人, レソト: 44.2人である。(人口は1980年推計)

(49) Murray, Colin, *Families Divided*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981, p. 89.

(50) *Ibid.*, p. 75.

続く3カ月は低地の収穫期であって、労働者は山地から出る。9月は山地の耕起の季節であり、労働者は低地より出る。10月から12月までは低地の耕起の季節であるから、労働移動はふたたび山地より行なわれる<sup>(51)</sup>。

労働移動が農閑期にのみなされるのであれば、農業生産に影響しないはずである。農繁期の主要な農作業は、ここでも耕起、播種、除草、収穫であるが、耕起は固くて乾燥した土壌では重労働である。レソトの低地の北部に位置するハ・モラポ（Ha Molapo）村で、1974年10月の耕起期に、73世帯（household）のうち46世帯（63%）は成人男子（17歳以上）が不在であった。耕起と除草という農繁期のピークに労働力が絶対的に不足している<sup>(52)</sup>のである。

レソト社会にも性別・年齢別分業があり、耕起は本来青年男子の仕事であったが、その不在によりいまでは少年と女達によって支障なく行なわれているのか、もともと成年男子は少年と女によって実施される耕起を監督してただけなのか、というような事情は明らかでない<sup>(53)</sup>。労働移動による成年男子の不在は、農業技術改良導入者の不在を意味し、長期的にはこのほうの影響が重大ともいわれる<sup>(54)</sup>。出稼ぎに行った者が出身農家に送金するか、現金または物品を持ち帰るならば、これは不在中の労働力の損失を補償するかもしれない。

1970年の農業センサスによると、低地の世帯の35%は1台のスキを所有していた。半数以上は家畜をまったく所有しておらず、家畜（牛）の70%以上は10人以下の家長の群に属していた。耕起には牛と労働者が必要なのであるが、雄牛は冬季の過剰放牧により飼料が不足しているために、耕起の際には良好な状態にない。1972～73年度にハ・モラポでは、2世帯だけが自分の保有する家畜群から、6頭の牛から構成される耕起チームを組めた。たいていの世帯は、他の世帯の家畜と共同で使用するか、牽引力を耕起請負人——トラクター所有者または1組の牛（cattle team）の経営者から直接に賃借しなくてはならない。レソトにはすでにトラクターが導入されている<sup>(55)</sup>のである。

バソト（Basotho）（レソトを故郷とする人々の総称）農民の世帯間の契約形態は以下のように要約される<sup>(56)</sup>。

(1) 土地保有者はトラクターを賃借する。日本流に言えば賃耕してもらう。トラクター所有者のほとんどはよそ者の企業家であり、商業ベースで行動する。

(2) 土地保有者は1組の牛を賃借する。農作業のパーティーは血縁関係にもとづく場合と、そう

注 (51) Elkan, p. 592.

(52) Murray, p. 76.

(53) Elkan, p. 592. 性別・年齢別分業については、矢内原、前掲書、62～67ページ参照。

(54) Elkan, p. 592. この事実はほかの出稼ぎについても指摘されている。たとえば Alurland, 矢内原、前掲書、75ページ。

(55) Murray, p. 76. ケニアの白人入植者がトラクターを導入した結果、6頭引きのスキをアフリカ人に払い下げたという。犬飼一郎「農業開発と生産技術の変化」『アジア経済』22巻11-12号（1981年11月）、13ページ。

(56) Murray, p. 77.



### 経済発展についての農業の役割

でない場合があるが、たとえ血縁関係にあっても、耕起あるいは播種に対して現金が支払われる。

(3) 耕起あるいは播種作業が、労働、家畜、農器具の形態での相互扶助によって行なわれ、現金支払いはなされない。

(4) 土地所有者は収穫の半分を与えることにより耕起をしてもらう分益契約をする。請負人がトラクターまたは1組の牛を所有していれば、自分で土地を耕起する。そうでなければ、請負人は自分で耕起のためにトラクターまたは家畜所有者を雇用(賃借)する。いずれの場合にも、土地所有者と分益請負人は種子と肥料と除草と収穫のための労働に対して共同責任をもつ。分益請負人は土地所有者に対して劣位の刈分け小作人とはみなされないようである。

(5) (4)の型の変形であるが、請負人が土地所有者の土地の一部をまったく私的に使用する場合には、土地所有者と独立に種子、労働その他に責任をもつ。この点にだけ注目すれば、この型はセネガルの落花生生産農村に入る労働者と似ているが、セネガルでは農家に住み込みの移動労働者であり、農器具は土地所有者から労働提供と交換に借用する点等はかなり異なっている。<sup>(57)</sup>

(6) 除草と収穫のための労働については、(a) 雇用労働者に対して日給か現物を支払い、(b) 相互扶助もしくは農作業を手伝ってくれた人々に、その日の食事とビールを提供する。後者は西アフリカの農村でよくみられる慣行である。

これらの事情を経済学的に分析すれば、トラクターと1組の家畜(牛)は牽引力として代替的な資本財である。このような資本財と土地との組み合わせは労働節約的技術とみなされる。資本財の入手には貨幣所得が必要である。貨幣所得を得る手段としては南アフリカ共和国への出稼ぎがある。レソトの農業生産性が低下し、他方で南アフリカ共和国内の賃金率が上昇した結果、人々は出稼ぎに行く。そうするとレソト農業にとって労働力はますます不足することになる。

経済学的論理と矛盾するのは、この調査研究の各所で強調されているレソト内の土地不足である。土地が希少であるから、地力を回復させるための休耕は行なわれないと記されている。<sup>(58)</sup> 収量の増加は、また改良品種と窒素あるいは磷肥料の使用に依存しており、これらの入手にも貨幣所得が必要である。ところが通常は品種改良や化学肥料の導入は土地節約的技術とみなされる。それではレソト農業の制約条件は土地にあるのか、それとも労働にあるのか。

徹視的レベルの事例を三つあげる。<sup>(59)</sup>

#### (1) 第1夫人の窮状

'MaPeete という名の1914年生まれの女は、ある農民の第1夫人である。彼女は1枚の畑を保有している。1972~73年度と1973~74年度に、彼女は第2夫人の弟の妻 'MaRosa と分益契約を結

注 (57) 矢内原、前掲書、88~92ページ。

(58) Murray, p. 77.

(59) *Ibid.*, pp. 80~84.

んだ。'MaRosa とその夫は土地がなく、夫は炭鉱への毎年の移動労働者である。'MaRosa は耕起のためのトラクター代を支払ったが、他方播種機つきの家畜と種子の費用は、半分はトウモロコシ、半分はソーガムという現物の形態で、'MaPeete 側のパーティーと 'MaRosa 側のパーティーで分担した。除草期間に 'MaRosa は病気だったので、一緒に住んでいる若い女の助力を有料で得た。彼女たちはまた他の2人の女を共同で雇用した。収穫は 'MaPeete と 'MaRosa で行ない、各々は親戚から無料の助力を得た。収穫は 'MaPeete と 'MaRosa 間で平等に分けたが、1973年の市場価格で収穫は現金投資分を取り戻せなかったため、1974~75年度には60歳の 'MaPeete はヨハネスブルグに家政婦として働きに行かなければならず、分益契約は中止された。夫は恒常的所得がなく、第2夫人による大家族を扶養しなければならなかったため、'MaPeete は家計収支を合わせることができなかったためである。'MaPeete は 1975年にレソトに戻った。夫の2人の年長の息子はともに鉱山に出稼ぎに行っており、うち1人は彼女の農耕のために送金してきたため、彼女はもはや分益契約の必要がなくなり、家計の補助のためにビールを醸造することになった。

### (2) 3世帯の共同農耕

隣りどうしの3世帯 Tsoeu, Malefetsane と Malefetsane の兄(弟)の未亡人 'MaFetang は、1972~73 農業年度に共同農耕を実施した。Tsoeu と Malefetsane はそれぞれ2枚の畑を、'MaFetang は3枚の畑を保有していた。この共同農耕の基本的形態は、6頭の牛と2人の労働者から編成される耕起のチームである。Tsoeu 所有の3頭と Malefetsane 所有の3頭の牛に、'MaFetang のスキと Malefetsane とその長男の2人の労働者を組み合わせることにより、完全な耕起チームを編成することができた。このチームにより Tsoeu の1枚、Malefetsane の2枚、'MaFetang の2枚の畑を耕作した。Tsoeu のもう1枚の畑は、彼がトラクターを賃借するための現金を提供する義理の息子との分益契約によって耕作した。'MaFetang の残る1枚の畑については記述がない。

1973年10月に Malefetsane は3頭の牛を息子の婚資のために手放し、彼と彼の息子も耕起の季節に出稼ぎに行き行って不在であった。しかし、'MaFetang が牧童がいなかったために他所にやっていた2頭の牛を連れ戻し、Tsoeu が牛1頭を友情により借り、労働力も Tsoeu の姉(妹)の息子と、彼の若い息子によって補充されたため、耕起のチームを編成することができた。

1973年11月の耕起季節の終わりに、Tsoeu は娘の結婚の饗宴のために1頭の雄牛を殺し、1974年10月には 'MaFetang は牧童が自分の家に帰ったため、もはや牛をハ・モラポにおくことができなくなった。Tsoeu の妹の息子は鉱山に行き、Tsoeu の若い息子は学校が始まり、Tsoeu 自身の健康状態がわるくスキを扱えなかった。3軒の共同組織は1974年10月に分解し、各自が個別に誰かと契約しなければならなくなった。

### (3) 出稼ぎと農耕の組み合わせの成功

経済発展についての農業の役割

'MaFako の夫, Polao は南アフリカの工場で労働しており, 彼は定期的を送金してくるし, また年に2, 3度休暇をできるだけとって戻ってくるので, 妻の 'MaFako が2枚の畑をうまく経営している。保有家畜は雄牛1頭, 牝牛2頭, 子牛3頭, ロバ2頭である。

その農業経営状態は第5表にみられる。

第5表 MaFako の農業経営, 1972-73年度

畑A		(単位ラント)
耕起	トラクター賃借	11.00
播種	隣人の牛と播種機賃借	3.00
種子	協同組合から購入したトウモロコシ	4.90
肥料	3袋	7.50
除草	妻, 夫の母の兄(弟)の妻	—
収穫	妻, 夫の母の兄の妻, 妻の兄(弟)の妻	—
産出量	トウモロコシ13袋	
		貨幣支出 26.40
畑B		
耕起	夫の母の姉(妹)の牛を賃借	8.00
播種	手播き	—
種子	前年の収穫よりのソーガム	—
肥料	なし	—
除草	畑Aと同じ	
収穫	畑Aと同じ	
産出量	ソーガム1袋	
		貨幣支出 8.00

(出所) Murray, p. 83.

総現金支出は34.40ラント, 収穫のうちトウモロコシ1袋を'MaFakoの兄の妻に, ソーガム1カゴ(1袋から5~6カゴがとれる)をPolaoの母の兄の妻に, 農作業の手伝いの謝礼として与えた。'MaFakoは1973~74年度にも同様なアレンジをして, 費用は増加したが, トウモロコシ23袋とソーガム2袋を収穫できた。これは送金と農業を組み合わせることによって成功した顕著な例である。

1973年にハ・モラボに73世帯があり, 113枚の畑を保有している。この土地保有は, 伝統的な土地保有者あたり3枚の半分以下である。配分は平等でなく, 10世帯は土地がなく, 30世帯は畑1枚, 20世帯は畑2枚, 11世帯は畑3枚, 残りの1世帯が4枚, もう1世帯が6枚の畑を保有している。

この状況を土地不足と呼ぶのであろうが, 1972~73年度にハ・モラボの畑113枚のうち25枚(22%)は耕作されていない。耕作されている88枚のうち16枚は分益, 72枚は種々な形での請負契約および共同請負契約の下に耕作されていた。<sup>(60)</sup>したがってこの経済は土地が不足というよりも, 労働力不足ないしそれと代替する資本財入手のための現金所得不足が生産の制約条件になっているものと考えられる。

注(60) *Ibid.*, pp. 78~79.

この社会のトラクター所有者は、これを賃貸する企業家であり、よそ者である。新しい農器具が導入されると、よそ者が勢力を得るか、所得の分配が一層不平等になる傾向がここでもみられる。

### III 結 び

アフリカ諸国の人口密度は、国によってかなりの格差があるが、このような指標からは、農業生産にとって土地と労働のいずれの生産要素が制約であるかを判定することはできない。ここで採りあげた事例をみると、土地豊富地域はもとより、人口稠密地域、部分的土地不足地域も、周辺にはなお未耕地が存在するので、地域を広くとれば生産の制約条件は労働にあるようにみえる。とくに<sup>(61)</sup>農繁期の耕起、播種、除草、収穫労働が雨季の短い期間に集中するとき、各ピークでは労働力が不足傾向にある。

住居の周辺では土地が不足するので、農民は労働集約的技術を用い、遠隔のブッシュでは粗放的技術を用いている。しかし全般的に労働が不足であるならば、導入される新しい技術は労働節約的ではなくである。したがって労働節約的技術とみなされる家畜牽引もしくはトラクター牽引スキと播種機の導入が、政府もしくは民間の企業家によって企図されるのは妥当な方向とみられる。しかしセネガルの落花生生産地帯でこのような技術が導入されると、可耕地面積が増加するので労働時間もまた延長されるという事例もみられる。<sup>(62)</sup>これによって労働時間あたり収穫量は不変であっても、農家あたり産出量は増加する。

農産物産出量の増加を政策目標とする政府は、また改良品種と化学肥料の導入にも熱心である。この技術は土地節約的技術である。日本では労働に対して土地面積の小さいことと地主・小作関係不変を前提条件として、明治維新以降まず品種改良と化学肥料の投下が政策として推進された。ところが1960年代から稲作は牛馬による耕起がトラクターに代替され、除草労働は農業によっていちじるしく軽減された。従来からある化学肥料に加えて、トラクター等の機械や農薬の購入には貨幣が必要である。この貨幣収入は兼業もしくは農外所得によってまかなわれた。第2次大戦敗戦直後の米不足時代には、土地面積あたり収穫量を増加することを主要目標とした篤農家すなわち米作日本一の競争は意味があった。今日では年間労働時間あたり収穫量がいちじるしく増加しているはず

注 (61) サハラ以南のアフリカの典型的状態が相対的な土地豊富にあることは、一般的に認められるところであろう。たとえば Levi, John and Michael Havinden, *Economics of African Agriculture*, Longman, Harlow, 1982, p. 160.

(62) セネガルの落花生生産の新開地の事例。矢内原, 前掲書, 156ページ, Rocheteau, G., "Pionniers Mourides au Sénégal: Colonisation des Terres Neuves et transformation d'une économie paysanne", *Cahiers ORSTOM, sér. Sciences Humaines*, Vol. VII. N° 1, 1975, p. 39, Tableau XI. また一般論として, ココアの植樹, 恒久的耕作のための沼沢地の開拓, スキの製作あるいは購入, 牽引用動物の飼育, 段々畑の造成のような資本形成は労働集約化をもたらす, という指摘もある。(Levi and Havinden, p. 91).

### 経済発展についての農業の役割

である。稲作だけでは家計収支をまかなえず、兼業もしくは農外収入が必要だといわれるが、<sup>(63)</sup>もし機械化、化学化、装置化（ガラス温室やビニール・ハウス）に依存する農業をやめて、労働をこれら新技術導入以前のように投入すれば、収穫量を不変に保てるかもしれない。おそらく労働の限界苦痛という問題があり、たとえば農業により一度炎天下の除草作業から解放されると、ふたたびこのような作業に戻ることは不可能なのであろう。労働の苦痛を考慮すれば、このような労働節約的技術進歩は非可逆的過程と思われる。

段階的に土地節約的技術から労働節約的技術に移行した日本農業も、今日、その両方の技術進歩率はともに正である。この点では土地節約的もしくは労働節約的性格のいかんにかかわらず、技術導入は1人あたり農家所得の関数ではないかと思われる。

山田三郎と Ruttan, Vernon W. は、縦軸に土地面積あたり肥料投入量、横軸に男子労働者あたりトラクター馬力をとり（ともに対数目盛）、先進国・発展途上国36国をとり、1960年から70年への変化をクロス・セクションで比較している。<sup>(64)</sup> モーリタニアがトラクター馬力数が減少し（左上がり）、ペルーが肥料投入量が減少し（右下がり）を示していることを例外とし、他のすべての国はともかく両指標とも時とともに増加（右上がり）している。

彼らは労働を代替する（たとえばトラクター）技術を機械的技術、土地生産性を増加する技術を生物学（biological）技術と呼んでいるが、<sup>(65)</sup> 後者は化学的技術であって、機械的技術は労働節約的、化学的技術は土地節約的と考えることができる。

熱帯アフリカ農業に新しい技術が導入される場合には、段階的ではなくて労働節約的技術も土地節約的技術も、それらが農家あたり収穫量を増加させる以上、同時並行的に企図される。これらの新技術の導入には貨幣所得が必要であるから、首長（大土地保有者）と企業家的精神をもつよ者が新技術の受益者となり、階層分化の傾向に拍車をかける。<sup>(66)</sup> 新技術の導入が国民経済全体の富裕化と

注 (63) 逆にみれば、1966年頃から第二種兼業農家は農業社会内での最高生活水準を維持するために、農業所得からの補充を必要としなくなったのである。（『農業経済概論——戦後日本農業の展開と現状の分析——』全国農業協同組合中央会、1982、39ページ）。1980年には、零細規模層では、農家所得に占める農家所得の比率は90%をこえた。（同書、261ページ）。また1980年には、農業専従者のいない農家が61%、農家専従者が女子のみの農家が10%、他方で男子専従者1人の農家は25%、同じく2人以上の農家は5%に激減し、専従者のいない農家と女子のみの農家が70%を上回るようになった。（同書、302ページ）。

(64) Yamada, Saburo and Vernon W. Ruttan "International Comparisons of Productivity in Agriculture," as Ch. 10, in Kendrick, John W. and Beatrice N. Vaccara (eds.) *New Developments in Productivity Measurement and Analysis*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1980, p. 546, Fig. 10. 11.

(65) *Ibid.*, p. 512.

(66) 技術が伝統的技術の延長上になく、近代的（alien）技術である場合には、この導入に必要な貨幣費用を負担できるのは富農である。（Levi and Havinden, 1982, pp. 163~165）。緑の革命の評価も、これが資本集約的（bimodal）技術か、それとも規模の経済的作用しない（unimodal）技術であるのか、評価はわかれるが、（Levi and Havinden, p. 153）、緑の革命が富農と貧農の格差を拡大する傾向は広く指摘されている。たとえば、Brown, Lester R., *Seeds of Change*, Praeger Publishers, Inc., New York, 1970, 逸見謙三監訳『緑の革命——国際農業問題と

機械や化学肥料が国内で生産されることによって相対的に低費用となったため、可能となった日本とは、この点が異なるのである。

他方、農村内に貨幣所得を得る手段のない農民は、これを出稼ぎによって入手するしかない。農村内で換金作物の栽培が可能であれば、農民は自給用作物栽培、換金用作物栽培と出稼ぎという三つの選択肢をもつ。出稼ぎが農閑期だけに行なわれるならば、労働の無制限供給の状態に近いが、いくらかでも農業生産に影響するならば、年間を通じての労働配分のトレード・オフがある。自給用作物栽培と換金用作物栽培が同じ土地で可能ならば、どちらを優先するかについて、労働と土地の配分が問題となる。換金作物が自給用作物とまったく異なる土地で行なわれる場合にでも、労働配分はなおトレード・オフの関係にある。

農業ないし牧畜業において、牛に対する伝統的価値観が生産増大にとってのマイナス要因となっている社会もあるし、出稼ぎが所得格差だけではなく、青年の伝統的社会秩序からの脱出、またいわゆる都市キラキラ仮説を支持するような非経済的要因によってなされる状況<sup>(67)</sup>もみられる。もし農民が家計所得最大化を目標とした合理的行動をとるものと仮定すれば、農民の選択は自給用食糧価格と換金作物価格および出稼ぎの賃金率に依存するはずである。<sup>(68)</sup>

農民の貨幣所得稼得の目的は、(1)税の支払い、消費財の入手、(2)農業技術の導入のためである。(1)については消費財のなかに食糧そのものが含まれている場合もある。(1)が貨幣所得が農業生産と直接の関係がないのに反し、(2)ではこれが農業生産に直接関係し、その意味で今日の日本農業と類似の問題を提出している。

工業化を促進するために、都市ないし工業部門内の賃金率を相対的に高く維持すると、都市に農村からの移動労働者が溢れて都市問題をひきおこし、また換金作物が輸出用1次産品ならば、都市への移動は外貨稼得力を減少させ、ひいては輸入資本財に依存する工業化をおくらせる。<sup>(69)</sup>

国際貿易理論からは、もしその国が要素賦存からみて、輸出用1次産品に比較優位をもつならば、これの生産に特化して食糧を輸入する分業が肯定される。今日の世界の大きな農業生産地帯は先進国である。たとえばアメリカが、当初は保護政策によったにしても、いまや農業生産に余力をもち、これを世界政治のバーゲン・パワーに使おうというのであれば、発展途上国が食糧自給率を引き上げようとする政策をとることも理解できる。もしこの政策を肯定するなら、国内食糧価格を相対的に高く維持しなければならない。そうすると工業部門に対する無制限の労働力供給は不可能となり、

経済開発——」農政調査委員会、1971、長谷山崇彦『アジアの農業と食糧問題』東洋経済新報社、1975、第1部2。  
注(67) 牛が耕起や播種に用いられるときは資本財であり、食糧として殺されるときは消費財である。(Levi and Havinden, 1982, p. 92 参照)。牛が結婚式や葬式のときに殺されるのは、農業労働力確保のための投資ともみられる。

(68) 矢内原、前掲書、VI, 4 参照。

(69) 同書、VI, 23 矢内原 勝「西アフリカ諸国都市内フォーマル・セクターとインフォーマル・セクター——農村より都市への移動——」『アジア経済』23巻10号(1982年10月)参照。

経済発展についての農業の役割

外貨稼得も減少することを覚悟しなくてはならないであろう。

食糧供給，外貨稼得，工業（都市）部門への労働供給という農業の三つの機能は相互に矛盾する可能性の認識が重要なのである。

（経済学部教授）